
KISHIDAIA №.46 目 次

Simon のこと	松 本 誠 治	1
クモ 6 種の卵のう	鈴 木 勝 浩	6
或るコサラグモの記録	佐 藤 幸 子	9
キゴシジカバチに狩られたクモ	嶋 田 順 一	18
Note クサグモ(2) — 天敵について —	栗 原 輝代子	15
観 察 裏 話	佐 藤 幸 子	16
近ごろ面白いと思ったこと	中 平 清	17
クモの卵のう写真集(1)	新 海 栄 一	19
東京蜘蛛談話会観察会報告 1979年春～1980年冬		
城山(根小屋城跡)のクモ	高 橋 登・松 浦 祐 司	25
編 集 後 記		32

Simon の こ と

松 本 誠 治

(杏林大学医学部生物学教室)

SIMON (Eugène) — 1848年4月30日パリで生まれ、1924年11月17日パリで死亡した。我々がいままでに出逢った最も偉大なクモ学者であると確信できる。大変裕福であったので、生計をたてるために仕事につく必要がなかった。そのため全生涯をいろいろな研究、特にクモの研究に捧げることができた。すぐれた博物学者で、クモの研究の他に、鳥・甲殻類・昆虫・キノコの研究も行った。動物学者全員によく評価され、フランス昆虫学会の会長に3度選ばれた（最初は、1875年で彼が27才のときである。）。1908年には同学会の名誉会長に選ばれた。また、1882年に動物学会の会長に、1909年には科学アカデミーの通信会員に、そして1918年には博物館の参与になった。

16才のときに、処女作である*Histoire naturelle des Araignées*の第一版を出版した彼は、2つの主著と319篇のクモに関する報文や論文を、彼の生涯にわたって絶え間なく発表した。

(2つの主著とは*Les Arachnides de France*と*Histoire naturelle des Araignées*第二版である) 彼は、コルシカ・シシリー・スペイン・アルジェリア・モロッコ・ヴェネズエラ・スエズ・紅海・フィリピン・セイロン・Colonie du cap・トランスヴェールへのクモ採集旅行や、探検家へのクモ採集の依頼を通じて、収集した全世界のクモを研究した。彼は非常に多くの属と種を創設している。種類ごとの、またグループ全体についての彼の広汎な知識は、科グループの類縁関係に基づいた興味深い分類体系を作り上げることを可能にした。よりよい分類体系への検討が今日行なえることを可能にしたのは、全てのクモ学者によって長い間採用されてきた、この分類のおかげである。

これは、Bonnet, P. (1954) によるE. Simonの記事である。Matthews, J. R. (1968) によって少し補足してみると、Eugène Louis Simonの父、Charles Simonは基礎医学者で、彼をよく植物園へつれていったり、BuffonやCuvierの著作を買ってやったりした。15才までは、E. Simonは人文科学に興味を持っていたけれども、クモ形類への特別の興味を持ちはじめ、フランスとベルリンの昆虫学会の会員となった。教育はソルボンヌで受けている。フランス国外への旅行も多く行なったが、フランスでのクモの採集の好時期である春と秋にはフランス各地でクモの採集を行なった。クモ以外の研究では、1886年に甲殻類について著名な著作を発表し、1921年にはハチドリの業績*Histoire naturelle des Trochilidés*を著わし、また植物学者・菌類学者としてもその方面で、それぞれ重要な論文を発表している。Lois Pasteurの生誕100年祭の年、すなわち1922年、Simonはレジオン・ドヌール勲章を受けた。

Simonはクモの採集については、珍らしいものだけを採集するのではなく、一般的なものにも注意をはらい、数多く採集した。その結果1種で数百個体もの標本のある種があり、標本ビンの数は2万本以上となっている。それでも、Simonはその1個体1個体の採集地を思い出すことができた。

この標本の数は、Simon が新種記載したハエトリグモを M. E. Galiano が再記載したとき、時間はまるまる2年かかり論文は200ページのものになったことでも、その多さが想像できる。

Simon は、彼の旅行に随伴し、標本の整理・管理に協力しつつけた女性と結婚した。彼女は家庭内でも、標本の整理・管理の仕事と同様に、献身的で有能であった。Simon は自然科学への興味ばかりでなく、パリの歴史についていろいろ探索する興味を持っていた。

以上が Simon のプロフィールである。Matthews の記事は、Berland, Bonnet, Fage, Hellmayr, Levi, Nordenskiöld, Savory などの文献を引用している。

このような偉大な Simon の研究・業績についても、現在からみれば、やはり過去のもので、その時代の制約を受けて、欠点とみられるものがあってもしかたがない。例えば、Simon は、彼が同一種と認めた標本は、1つのガラス瓶にまとめてしまっていた。また標本ラベルも略記号を多く使っていたり、記載文は短かすぎて、付図も少ないことが不満な点として指適できる (Levi, 1966)。これらのことは、Simon が“種”の記載者ではなく、クモを全体的にみわたす総括者であったことで、具体的には“属”のレベルでクモを取り扱っていたことでわかる。その態度は、彼の主著の1つ、*Histoire naturelle des Araignées* 第二版の構成をみればわかる。(勿論、当時でさえ15,000種以上の種が存在していたので、種レベルでの詳しい検討は、個人の能力では不可能であったであろう (Bonnet, 1966))。また、現在では、分類標徴として当然扱われる生殖器の構造については、Simon はほとんど言及していない (Levi, 1966)。また、“進化”についての記述もない (Levi, 1966)。前者については Simon 自身が、*Les Arachnides de France* 第六巻で次のように述べている。「本書第五巻発行後、30年もの間第六巻の発行が遅れた。この間にクモ学は進歩し、Kniczynski, Bösenberg, R. de Lessert などの論文では、以前は使われていなかった、しかし今日では属と種の標徴として考慮せずにはいられない形態が採用・掲載されている」。1914年の文章である。このような事情は、現在でも全く同じで、行動学・生理学・生化学・細胞学の結果が分類にとり入れられたり、形態についても肉眼ルーペー (光学顕微鏡) - TEM あるいは SEM への技術的發展に伴う微細構造への接近は、分類標徴の採用の態度にかかわっている。問題はむしろ、鑑別分類か、系統あるいは進化学的分野かという点であろう。後者“進化”の記述の欠落については、Simon のソルボンヌでの教授であった Lacaze-Duthiers に影響を受けたのかもしれない。彼は進化論についてはとても懐疑的で、彼の教え子すなわち Simon 達に、その態度を明確にしていた (Nordenskiöld, 1928)。また Simon は、論争を徹底的に避けており (Levi, 1966)、思考に迷い込んでしまうことも避ける努力をし、哲学者でもなかった (Berl (Berland, 1924))。

技術的問題ではあるが、もう1つ見落せない事実がある。Berland と Fage の書いた *Les Arachnides de France* のあとがきである。「Simon は、アルコール液浸標本を観察する際、一度乾わかしてからそれを行ない、再びアルコール中に保管した」ことである。このような方法では、外雄器や、雄の触肢の構造は、詳細には観察できなかったであろう。本著第六巻第二部以降の挿図と脚注の作成を行ない、Simon の遺稿として発表した Berland と Fage は、その図を描く際に、液

浸のまま観察したことを、あとがきに明記している。

Roewer (1942) より、Simon の論文を年代順にかぞえてみると表1のようになる。

表 1 Simon のクモ学関係文献数 (Roewer, 1942より計数)

年	論文数	年	論文数	年	論文数	年	論文数
1864	1	1879	4	<u>1894</u>	3	1909	6
1865	0	<u>1880</u>	14	<u>1895</u>	8	1910	4
1866	2	1881	7	1896	10	1911	2
<u>1867</u>	1	1882	4	1897	15	1912	1
1868	2	1883	2	1898	8	1913	1
1869	0	<u>1884</u>	18	1899	8	1914	2
1870	4	1885	10	<u>1900</u>	7	1915	0
1871	1	<u>1886</u>	7	1901	12	1916	2
1872	2	1887	9	1902	10	1917	0
1873	6	<u>1888</u>	11	1903	12	1918	3
1874	6	1889	6	1904	5	1919	1
1875	7	1890	5	1905	5	1920	0
<u>1876</u>	6	1891	10	1906	6	1921	0
1877	7	1892	8	1907	5	1922	2
1878	8	<u>1893</u>	6	1908	5	1923	1

(下線は日本に関係のあるクモの新種記載の発表年である)

Simon が死亡した1924年には、彼の論文は発表されていないが、1926年に1篇、1929年に1篇、1936年に1篇発表され、BerlandとFage の編集によるLes Arachnides de France等第六巻第二部から第五部までの4篇がSimon の名で発表されている。表中の下線は、八木沼(1977) からSimon の命名した種の命名年によっており、それらは以下の26種である。

<i>Leptoneta japonica</i> Simon, 1893	ヤマトマシラグモ
<i>Scytodes nigrolineata</i> (Simon, 1880)	ヤマシログモ
<i>Ariamnes cylindrogaster</i> Simon, 1888	オナガグモ
<i>Chrysso vesiculosa</i> (Simon, 1894)	ヒシガタヒメグモ
<i>Diplocephalus mustelina</i> (Simon, 1888)	カニミジグモ
<i>Gonatium japonicum</i> Simon, 1894 (nom, nud)	ヤマトケズネグモ
<i>Solenysa mellottei</i> Simon, 1894	アリマネグモ
<i>Acusilas coccineus</i> Simon, 1895	ハツリグモ

<i>Arachnura melanura</i> Simon, 1867 (同定?)	オヒキグモ
<i>Araneus mitificus</i> (Simon, 1886)	ビジョオニグモ
<i>Araneus rufofemoratus</i> (Simon, 1884)	アカアシオニグモ
<i>Argiope arcuata</i> Simon, 1884	ナナイボコガネグモ
<i>Neoscona mellottei</i> (Simon, 1895)	ワキグロサツマノミダマシ
<i>Pasilobus bufoninus</i> (Simon, 1867)	ワクドツキジグモ
<i>Cicurina japonica</i> (Simon, 1886)	コタナグモ
<i>Coelotes modestus</i> (Simon, 1880)	ヤマヤチグモ
<i>Cybaeus mellottei</i> (Simon, 1886)	ナミハグモ
<i>Tricca japonica</i> Simon, 1888	ヒノマルコモリグモ
<i>Trocosa robusta</i> (Simon, 1876)	
<i>Heriaeus mellottei</i> Simon, 1886	アシナガカニグモ
<i>Philodromus spinatarsis</i> Simon, 1895	キハダエビグモ
<i>Xysticus ephippiatus</i> Simon, 1880	シナカニグモ
<i>Laufeia aenea</i> Simon, 1880	エキスハエトリ
<i>Orthrus bicolor</i> Simon, 1900	ニシキリセイハエトリ
<i>Siler cupreus</i> Simon, 1888	アカガネハエトリ
<i>Telamonia mellottei</i> (Simon, 1888)	

クモ学における Simon のこの偉大な足跡は、「18～19世紀には、動物学界全体がエネルギーに収集した自国はもとより異国の動物標本を、その時代の専門家にゆだねられ、分類・記載されていた。Simon の仕事もそのような動物学界の傾向に平行した結果であると評価できる」(Matthews, 1968)。それは正しいが、それに加えて自身で多く海外のクモを収集に出かけその中で、「フランスのクモ相の調査研究に限ってしまっていたら、完全に見逃していただろう事実、つまり *Hippasa* と *Podophthalma* の管状住居をもつ棚網の発見によるクサグモ科とコモリグモ科の類縁関係、を理解した」(Simon, 1897) ことなどの Simon のクモ学に対する情熱とそれに見合った活動力は高く評価されなければならないと思う。

引用文献および Simon 命名の日本産クモの原記載掲載文献

Berland, L. & L. Fage (1937) Postface in : Simon, E. (1937)

Les arachnides de France. 6 (5) : 1267-1268, Paris

Bonnet, P. (1954) Bibliographia araneorum. 1 : 1-832, Toulouse

Matthews, J. R. (1968) The life and works of Francis greatest arachnologist. *Bull. Brit. spider study gr.*, (38)

(*American Arachnology*, (20) : 7-11, (1979) に転載)

Roewer, C. Fr. (1942) Katalog der Araneae. 1 : 1-1040, Bremen

- 八木沼健夫 (1977) 日本産真正蜘蛛類目録。 *Acta arachnol.*, 27 (special no) :
367-406
- Simon, E. (1867) Sur trois araign. nouv. *Rev. Mag. Zool.*, 2 (19) :
15-24
- (1876) Les arachnides de France, 3 : 1-364, 5 pls. Paris
- (1880) Arachnides recueillis aux environs de Pékin par
M.V. Collin de Plancy attaché à la Légation française de Chine.
(Études arachnologiques 11e mémoire (1)). *Ann. Soc. Ent.*
Franch., ser. 5, 10 : 97-128
- (1884) Arach. rec. en Birma par Comotto. *Ann. Mus. Civ.*
Genova. 20 : 325-372
- (1886) Descr. de quelqu. esp. nouv. de la fam. des Agelenidae.
Ann. Soc. Ent. Belg., 30. C.R. : 56-61
- (1886) Arachn. rec. par Pavié dans le roy. de Siam, Cambodge
et Cochinchine. *Act. Soc. Linn. Bord.* 40 : 137-166
- (1886) Esp. et genres nouv. de la fam. des Thomisidae. *Act.*
Soc. Linn. Bord., 40 : 167-187
- (1888) Descriptions de quelques espèces recueillies au Japon
par A. Mellotée. *Ann. Soc. Ent. France*, ser. 6.8 : 248-252
- (1893) Descr. de quelqu. arachn. app. aux. fam. des
Leptonetidae et Oonopidae. *Ann. Soc. Ent. France, Bull.*, (62)
: 247-248
- (1894) Histoire naturelle des araignées (2e édition) 1 (3)
: 489-760, Paris
- (1900) Descr. d'esp. nouv. de la fam. des Attidae. *Ann. Soc.*
Ent. France, Bull., (69) : 27-61

クモ 6 種の卵のう

鈴木 勝 浩

(東京農業大学昆虫学研究室一年)

1. シモフリミジングモの卵のう

ボカシミジングモの卵のうは、学研の図鑑「クモ」の 83 ページに載っている。私は 1977 年 8 月に東京の三宅島で採集したシモフリミジングモで、飼育容器内ではあるが卵のうを確認することができた。卵のうは物に付着させるかたちでつくられ、ほぼ球形（直径約 5mm）であり、純白の糸でおおわれている。卵のうの周囲も純白の糸であり、割合に密で、物がたいへん付着し易く、卵のうを保護する役目が大きいと考えられる。（図 1）卵のうのつくり自体は同属（*Diploena*）であるボカシミジングモと同様であるが、異なる点はボカシミジングモの卵のうが黄色であるのに対し、シモフリミジングモが白色である点である。

採集後 1 日経た 8 月 4 日に産卵された卵のうは、8 月 12 日に孵化し、8 月 14～15 日にかけて第 2 令幼生となり、8 月 20 日に子グモ自ら卵のうより出てきた。出ろした子グモの数は 16 匹であった。卵のう内を調べたところ、孵化していない卵がなかったことより、おそらくこの個体の産卵数は 16 個であったとおもわれる。

2. ヤバネウラシマグモの卵のう

1979 年 7 月下旬に、神奈川県にある東京農業大学厚木農場の草刈りをしていた時、割合に湿った地表を徘徊していたヤバネウラシマグモの雌成体 4 匹を採集することができた。そのうち 2 匹が飼育容器内で産卵した。

卵のうは物に付着させるかたちでつくられ、たいへん扁平であり、やや肌色がかった糸でおおわれている。その糸はたいへん密であり、糸という面影は少なく、黄色の卵塊を保護するために、きちんと張られて緊張きったシートのように感じる。また、このシートの上には、一面に非常に細かな土の粒子がつけられていた。（図 2）この卵のうの様子から察すると、おそらく自然の状態では、落葉および石の裏・地表面に産卵されるのではないかと思われる。

7 月 24 日に産卵された卵のうは、7 月 31 日に孵化し、8 月 10 日に子グモ自ら 4 匹出ろした。産卵数は 4 個であった。7 月 30 日に産卵したものは、8 月 6 日に孵化し、8 月 16 日に 7 匹が出ろした。産卵数は 7 個であった。

3. チビアカサラグモの卵のう

1979 年 7 月下旬厚木農場で、地表より 10cm 前後のところの草間などにシート網を張り、平行背位に網の下側に占座しているチビアカサラグモの雌成体を多数見ることができた。また、雌雄が同居しているクモも 2 例ほど観察できた。

7月22日に採集したクモが、7月24日に容器内ではあるが産卵した。卵のうは、物に付着させるかたちでつくられ、正面より見ると裾野がたいへん広く、急に高度を増す小山（円錐に似ている）に見える。糸の色は白である。（図3）産卵されてから6日後の7月30日に孵化したクモは8月1日に6匹の子グモが山の地盤（底）の部分より出ろした。産卵されたものが、すべて出ろした。

私はこのチビアカサラグモの卵のうをみたとき、以前にも同様な形式の卵のうをつくったコサラグモの一種を思い出した。そのクモは1977年5月15日、埼玉県の中簗田においての東京蜘蛛談話会観察採集会にて、地表に生えている雑草をかきわけ、雨の中で採集したものであった。このクモを熊田憲一氏に同定をお願いしたところ、不明種とのお返事があり、現在、熊田氏のところに標本は保管されている。

4. クミササラグモの卵のう

KISHIDAIA 図43の10大ニュースの項に「クミササラグモの卵のう」が次のように記述されている。卵のうは物に付着させる形で卵のうの周囲は薄いが、糸が密で光沢のある天幕状の幕でおおわれている。……（後略）

私も1977年5月7日、埼玉県秩父の大輪で採集したクミササラグモで、飼育容器内ではあるが、卵のうを観察することができた。卵のうの様子はKISHIDAIA 図43に記述されている通りであった。（図4）

採集してから5日後の5月13日に産卵された卵のうは、5月21日に孵化、5月23日頃第2令幼生となり、5月28日に32匹の子グモたちは出ろした。この間、母グモは天幕状の外側で、卵のうを保護していたように見えたが、ショウジョウバエなどを与えると、母グモは捕食した。母グモは6月6日に死去した。

5. ヘリジロサラグモの卵のう

クミササラグモの卵のうを確認した同年8月4日に、東京の三宅島より採集してきたヘリジロサラグモが産卵した。卵のうのつくり、糸の様子などはほぼ似ているが、本種とクミササラグモとの相違点は、クミササラグモの場合、卵塊をつつんでいる糸と天幕状の幕とのすきまが均等でなく、卵塊の中央あたりで、卵塊をつつんでいる糸と天幕状の幕が接しているのに対し、ヘリジロサラグモは均等に1.5mmあまりのすきまがある。（図5）産卵してから6日後の8月10日に孵化し、8月12日・13日に第1回の脱皮をし、8月17日に17匹の子グモが出ろした。産卵数も17個と思われる。母グモは8月29日に死去した。

6. *Frontinella communis* の卵のう

私は幸運にも今年（1979年）の5月にアメリカ合衆国へ行く機会を得、数10種のクモを採集することができた。そのうち、テキサス州のFriedrich parkにて、サラグモの一種を採集した。本種は地上70～80cmの草の間にハンモック網を張っており、クモは網の下に平行背位で占座していた。本種の標本は新海栄一氏に*Frontinella communis*と同定していただいた。

5月10日に採集し、5月12日に飼育容器内で産卵した。産卵様式は、私が以前観察した日本産の2種と似ていた。卵塊をおおっている糸と天幕状の幕とのすきまが、せまかったことはクスマサラグモに似ていた。しかし、卵塊をつつんでいる糸も天幕状の糸も、やや黄色みがかったことは、日本産の2種と異なっていた。22個の卵のうち4匹しか孵化しなかった。

日本産のサラグモのFamilyに属するクモは60種近くもいるのに、いまだに1種も野外における産卵状況が確認できてないのは、クモ愛好家としても誠に残念に思う。ぜひとも野外で確認してみたいものである。

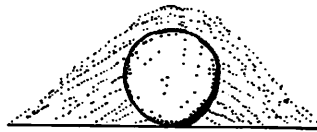


図 1

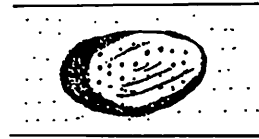


図 2

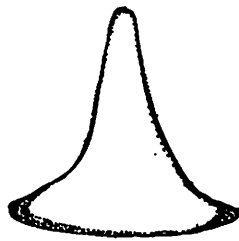


図 3

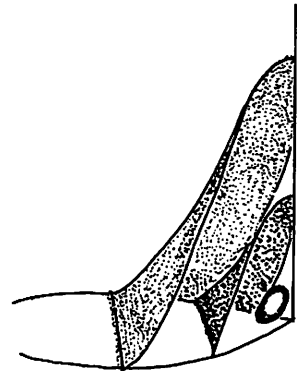


図 5

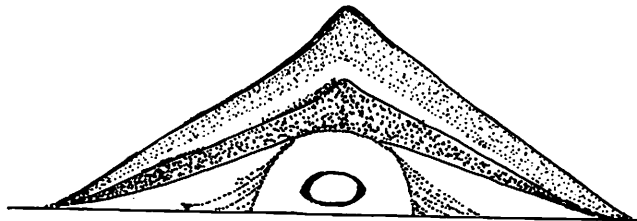


図 4

図1 シモフリミジグモの卵のう

図2 ヤバネウラシマグモの卵のう

図3 チビアカサラグモの卵のう

図4 クスマサラグモの卵のう

図5 ヘリジロサラグモの卵のう

或るコサラグモの記録

佐藤幸子

タテヤマサラグモをしらべている時、同じ場所で捕れた1匹の雌がいました。同種とも思われるのですがデモ何か歩脚の感じがちがうのです。(ルーペで見ると、タテヤマサラグモの脚より蒼みがかった見え、そのうえ毛の色も黒っぽい。)念のため容器に入れましたら、水を含ませた綿に産卵しました。それでその親グモをタテヤマサラグモと一緒にして、新海栄一氏に見てもらったところ、外雌器がちがうから別種だとの事で、残された卵と大事に育てる事にしました。(タテヤマサラグモ №45 P.8 参照)

(1 世代目)

1979年7月5日 産卵 雌体長 1.7 mm 飼育容器 直径 13 cm 高さ 5 cm

卵のう 白色 (1日たつとピンク色になる) 二枚貝型

卵 淡黄色 9個 0.5 mm 室温 22°C

7月12日 フ化 8匹 0.6 mm 室温 28°C (1令となる)

7月14日 8:00 脱皮 0.7 mm 透明な身体に黒い毛が生えて来た。(2令となる)
18:00 分散

7月28日 室温 29°C 夏の暑さになる。網型はトウキョウアカムネグモ (№44 P.6 参照) ヒロテゴマクモ (№44 P.7 参照) と同じ地表シート網型。移動がはげしく2日で住居を変える。

7月29日 昨夜のものらしい脱皮ガラがある。住居もヤヤ定まり1番大きい仔グモは1.2 mm位。仔グモの数は半分に減っている。又成長も非常に差がある。

8月2日 まったく別の網下に雄雌一緒に並んでいる。(図1) 体長もほぼ同じで1.5 mm位。長い間見ていたのだが少しも動きがなく、残念ながら交接は見る事が出来なかったが、今夜あたりではないかと思う。現在此の2個体しか見あたらない。

8月8日 雄雌の網が密着して造られ、雌が地表を走り餌を取ろうとすると、雄はその後をしきりに追う。

8月10日 産卵 (19:00と23:00の間) 雄体長 1.6 mm 雌体長 1.5 mm 室温 31°C
この2個体は標本となって新海氏行となりました。

☆ 1世代目の所見

○フ化より産卵まで29日かかる。室温 28°C ~ 31°C

○網 シート網で地表に造る。分散後移動がはげしかったが、11日目頃からヤヤ落着き住居が定まった感じ。

○雄雌の関係 交接の頃になると雌は別途に網を造り雄はその中に入って、しばらく仲良く過し

た後交接を行う。交接後雌は以前の網のあった近くに新しく別の網を造り、雄は雌の網に隣接して造網する。その上、雌の網の中を自由に歩きまわり網の補強など行い、雌はそれを心良くゆるしている。又雌が獲物を追いかけて走り出ると、飛んで来て雌の後をついて走り、決して離れない。

○湿気 湿気は充分以上に必要であった。湿気が少しでも少なくなると、成体も幼生も水を含んだ綿に住居を造る。7月5日産卵の卵ノウは、この綿に産みつけられた。

(2 世 代 目)

8月10日 産卵。卵のう 白色(1日たつとピンクになる)二枚貝型(〔1〕と同じ)地表と同等の壁に産卵する。室温 31°C

卵 淡黄色 6個 0.4mm

8月16日 フ化 6匹 0.6mm 1令となる 室温 30°C

8月18日 8:00 脱皮 0.7mm 2令となる

18:00 分散

8月24日 8匹に減ったが元気である。住居の移動がはげしく、身体もまだ白っぽい感じ。

8月27日 1匹しか見られない。(ガッカリ、)

9月 6日 1匹確認。網が定まり、水分補給の綿のそばにいつも住んでいる。

9月12日 体長1.2mm 住居内に脱皮ガラがあるが、いつのものかわからない。網巾を大分ひろげている。(室温25°C)

9月15日 脱皮 体長1.5mm

9月17日 完全に黒っぽい赤褐色となる。成体は♂である。(室温22°C)

9月19日 住居が古くなり、きたなくなると場所を変えて新しい住居を作る。交接の予定日なのだが♂1匹で可哀想。とにかく元気である。

9月30日 何故か1cmの高さに網を張る。この頃から容器の外へ出たい様子しきりである。

10月 2日 地表を走りまわっている。

10月 7日 雨、気温16°Cとなる。

10月22日 死亡 (室温 15°C)

☆ 2世代目の所見

○分散後移動がはげしかったが、19日目頃より住居定まる。(1世代目は11日目頃)

○フ化より30日目に最終脱皮(1世代目は17日目に最終脱皮を行う)

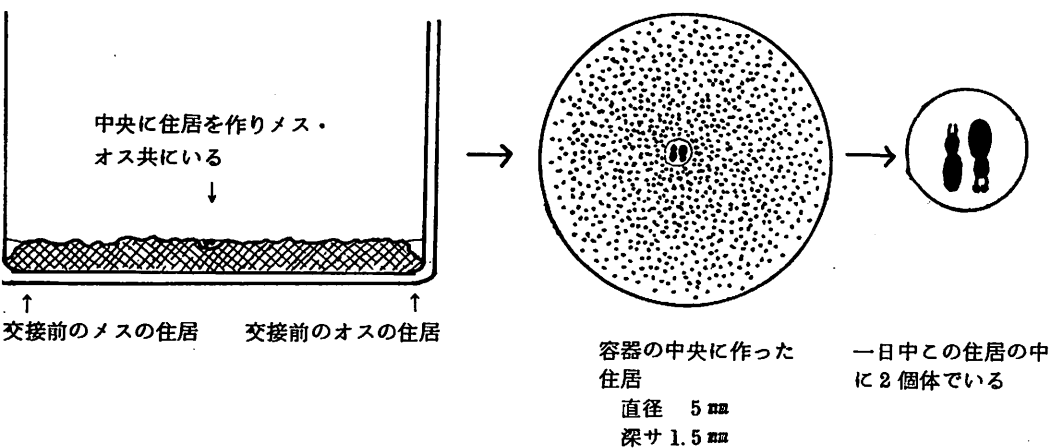
○1世代目とは逆に室温31°C~15°Cとなる。(最終脱皮の頃は室温22°C。死亡の頃は15°C)

○気温の巾は大体同じ様に思えるのに、成長時に気温上昇の場合と(1世代目)気温下降の場合と(2世代目)では、下降時の場合の方が何かにつけ時間がかかる様に見える。(図2)

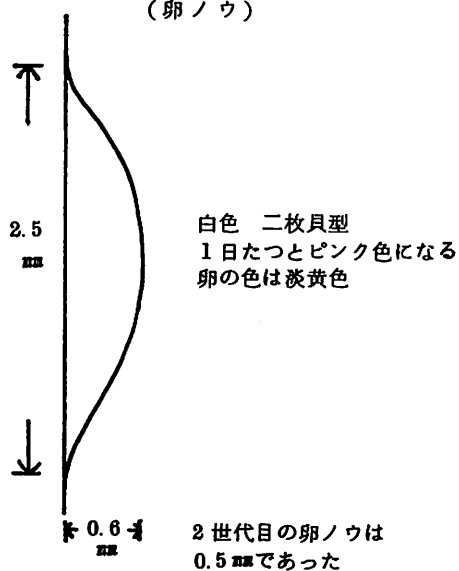
○交接しない雄は、交接を行った雄より寿命が長いのであろうか?。

最後に、同定其の他で色々お世話になりました新海栄一氏に深く感謝の意を表すると共に、紙上を借りてお礼の言葉をのべさせて頂く次第であります。

(図 1)

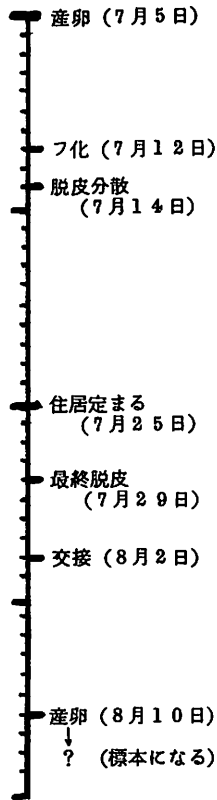


(卵ノウ)



(図 2)

1 世代目



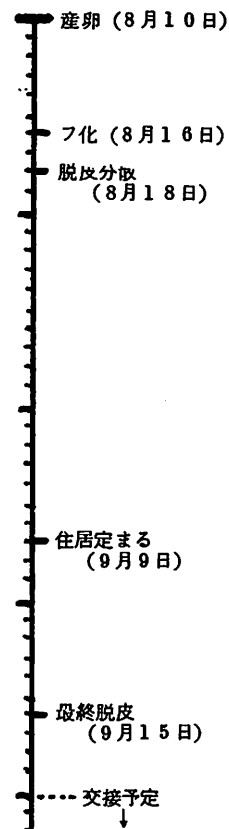
☆ 1 世代目

- 室温 22°C→31°C
- 分散後室温上り始める

☆ 2 世代目

- 室温 31°C→15°C
- 住居定まる頃より室温下り始める

2 世代目



キゴシジガバチに狩られたクモ

嶋 田 順 一

クモの天敵として知られているキゴシジガバチが昨年（1980年）8月、私の勤務しております工場の壁に幾つも造営しているのが見られましたので、その観察した結果を簡単に報告します。

キゴシジガバチに限らず、多くのハチがクモの幼虫のエサとして狩ることが知られておりますが、その観察記録の多くがハチの研究家によっております。キゴシジガバチの生態や狩られるクモに関するりっぱな報告もあり、今回の私の報告は、特に新しい内容ではありませんがクモに興味をもっている方のひとつの参考になれば幸いです。

キゴシジガバチ（*Scelphron madaraspatanum* (Fabricius)）は一般によく見うけられるハチで、コンクリートの壁などに泥で細長いタコツボ型の独房をいくつもくっつけて造り、最後に泥で上塗りをして全体をひとつの泥塊のようにします。その泥塊の大きさもさまざまで、2～3の独房からできている小さなものから、20以上の独房をもつ大きなものまであります。

下の写真は、私の観察したものを示してあります。これは、泥塊の一部を割った時の写真で、キゴシ

ジガバチのサナギとクモがつめられている状態がわかると思います。この泥塊の大きさは、たて7cm×よこ4cmで、20以上の独房から造られている大きなものでした。

泥塊の中において、そのほとんどが、サナギとなっていたため、ひとつの独房に入れられていたクモの個体数が確認できたのは4つのみでした。その結果は、キゴシジガバチの幼虫の体長とクモの個体数との関係で表に示してあります。狩られたクモの種類と個体数を見ますと、ドヨウオニグモが圧倒的に多く、次に、ハ



ナグモ、ゴミグモの順になっております。これは、キゴシジガバチが造営した周囲が水田地帯によるものと、季節的な要因が大きいと思われます。11月頃に造られた巣の中を見ますと、ハナグモの個体数が非常に多くなっております。しかし、この頃に造られた巣の多くは寄生バエ（ノミバエの仲間と思われる）の攻撃によって狩られたクモが外殻だけ残して食べられ、ミイラ化しており正確な個体数は確認できませんでした。

一匹のキゴシジガバチが成長するまでに必要とするクモの個体数は、今回の観察だけから見ますと、40頭余になると思われます。ただし、この個体数に関して、キゴシジガバチのオスとメスまたは、

狩られるクモの大きさによって、かなり変動はあると思います。いずれにしても、相当な数のクモがキゴシジガバチによって狩られてしまうわけです。

キゴシジガバチの幼虫 の体長 クモの種類	15mm	10mm	6mm	4mm
ドヨウオニグモ	6	23	29	33
ハナグモ	3	2		
ゴミグモ			1	1
ナガコガネグモ		1		
個体数	9	26	30	34

採取地：埼玉県川越市芳野台一丁目

採取日：1980年8月上旬

現在、私の勤務している工場の周囲に、次々と新しい工場が建ちはじめ、今まで見られていた水田や草原が見られなくなってしまう、今年はキゴシジガバチが巣を造らないのではないかと心配しております。

最後に、キゴシジガバチの同定および御指導していただいた、南部敏明氏と巣の採取に協力していただいた、渡辺公尚氏に感謝いたします。

参考文献

南部 敏 明；（1966）キゴシジガバチの習性、埼玉県立児玉高等学校 研究集録
No.1 P.17～22

岩 田 久二雄；（1978）昆虫を見つめて50年(1) 朝日新聞社

Note クサグモ(2)

—天敵について—

栗原輝代子

今回は、天敵について書いてみることにします。クモの天敵には、ハチ類が知られておりますが、その他の動物も天敵として数多くいることと思います。私もクサグモの卵のうに寄生する蜂を2種類ほど観察していますが、他の動物が食害した例について始めて観察をしたので、それについて記してみたいと思います。

少し昔のことになりますが(1978年秋)、クサグモの卵のうを採集中のことです。例の立方体の卵のうの中にあるはずの薄黄色のコロコロとした卵がひとつとしてない!というケースに何度か出会いました。卵のうには決まって大きな穴があいているのです。最初、これはコロギスかな?と思っていましたので、捕食現場を発見したならアルコール液の中で眠って頂こうと考えていました。だから別段ほかの動物が捕食する、などということはまったく頭にありませんでした。

卵のうの採集は調査のためとはいえ、まるでキノコ狩りのような感じで目を凝らして捜します(このごろ名人になりすぎて後指をさされていますが)。アオキやツバキや他の葉に落ち葉などが集っているような一見汚らしいところをひとつひとつ手に取って採集するもので、葉が奇妙に曲っていたり重なっていたりするところにも結構卵のうがあります。いつもの調子で枯れ葉を取り除いているとポトッと落ちるものがありました。下をみるとなんとアオズムカデです!こんな場所にいるものだろうかと思いながら、せっせっと卵のう狩りに熱中していましたが、今度はアオキの葉をくると巻いたところに卵のうがありましたので葉をとってひらいてみると卵のうの外側にアオズムカデがいました。もしかしたらこのムカデが卵を捕食するのかもしれないとふと思いましたので、採集をしてみることにしました。その後、またムカデを発見して、2匹持って帰りました。

このアオズムカデが本当に卵を食べるかどうかを調べるために、卵を10個程度与えてみることにしました。すると、第1脚で卵を持ちすごい顎でムシャムシャとまるでリスがおいしい木ノ実を食べる時のあの上から下へリズムカルな調子で、ほんとうに驚くような速さで全部食べてしまいました。

卵のうのあの厚いふくろを食いちぎり卵を食べている状態を野外で直接観察できなかったことが非常に残念ですが、おそらくこのアオズムカデが、クサグモの卵を食害する重要な天敵であることはまちがいないかと思います。今年は卵のう狩りに専念するだけでなく、その点についてもよく観察しながらぜひ見てみたいと思っています。みなさんも、機会がありましたらいろいろなクモで、天敵を観察してみませんか?

観 察 裏 話

佐 藤 幸 子

私に子供が二人います。その二人が高校生の時までは何となく外出できず（東京クモ談話会の採集会にも参加する事なく、クモの勉強が進まないのもガマンして）成人式がすぎてホットしたと思ったら、もっと大変な子供達が沢山私のまわりにいる事に気がつきました。それがクモの子供なのです。家の中や眼の前を終始フワフワ飛んでいるクモ達のほかに、卵から出て分散する子グモ達をしらべているうちに、いろいろ気のついた事がありますので、書いておきたいと思います。

○ビジョオニグモの観察をしていた時、フ化しない卵のほかに奇形・发育不全の個体がありました。それをそのまま1令2令の子グモと一緒にしておいたのですが、そのものはタダ動かないというだけで、みずみずしい様子をしているのです。（フ化しない卵は固く変形してしまいました）兄弟姉妹たちはそれぞれ少しずつ发育がずれながらも成長し、最後の子グモが分散した直後、奇形・发育不全の個体に変化がみられ、1日でカビが生まれました。それでこれらの個体も、今までちゃんと生きていたんだなと思ったのです。つまり子グモ達は、分散までの身体の栄養はもっていて、何もたべなくても良いのであるという証明です。（カバキコマチグモは何故親をたべるのでしょうか）

○タテヤマサラグモの場合、フ化から分散までがもうむずかしくて、気の休まる暇がありませんでした。フ化してもそのまま全部動きがなくなったり、又せっかく脱皮したのに（1日目はそれでもユツタリ手を動かしていた）2日目には動かなくなってしまう……。それで、ピンセットでさわってみたら力が入りすぎて、死んだ様に動かない身体から液体があふれ出しました。やはり分散の時期まで身体は生きているのです。

○タテヤマサラグモの子供（0.6mm）とコサラグモ科の子供（0.7mm）を同じ容器に入れました。分散してすぐの事です。コサラグモ科の子供は、とにかく1mm～1.5mmのシート網を作りその裏にかくれましたが、タテヤマサラグモはただ走りまわるだけ。日中は1mm位の土塊のかけにかくれているのですが、夜はしきりに徘徊しています。その内コサラグモの住居に接近し、コサラグモの子供は獲物と思って飛んで出ますが、2匹の手足が触ったとたんお互ハジケル様に後にとびのきます。その様子は、ビジョオニグモの子供達が1個の住居でもめている時、お互さわった手足をモシャモシャしていたのとは全然ちがいました。成体は同じ地表生活者であり、獲物のとり方も同じ、たべ方も同じ、又獲物を取った時住居が破けると餌をくわえたまま修繕する事など皆同じ様なのですが、科のちがいはこの様な小さい時からもう区別出来るのだなと、ツクツク感じました。

この様なクモ達を見ていますと、フ化した子供達が分散までにだんだん動かなくなっていく悲しさ。全部が無事分散した時の嬉しさ。又分散してから成体になるまで半分に減り、4分の1になり、しまいにはたった1匹になってしまった時の失望等々。母親の心労は一生涯続くものの様であります。

近ごろ面白いと思ったこと

中 平 清

(1) 下がり蜘蛛異聞

高知新聞に連載されている“事件こぼれ帳”にあった話である。

ある朝のことであった。Aサンゴ店の屋根がわらがはがされ、ポッカリ穴があいているのを見つけ、びっくりして警察に連絡した。刑事が調べた結果、この穴は確かに人為的なもので、泥棒が侵入するためにあけたにちがいないとなった。ところが、泥棒はこの穴からではなく裏口から入って、90万円相当のサンゴ製品を盗んでいたそうである。

さて、テレビドラマに出てくる忍者よろしく、天井からスルスルと降りてきて盗む手口を“下がり蜘蛛”というそうである。これは、盗人の隠語かどうかを確かめるべく新聞社へ電話したところ、盗人たちの隠語であると共に、刑事仲間の隠語でもあるとのことであった。なるほど、盗人と刑事とは対をなす存在であるから、共通語があるのは当然なことだ、それにしても“下がり蜘蛛”とは、なかなかしなやかな表現だなと感心した。

私たちのまわりには、朝の下がり蜘蛛を吉としてよろこぶ伝承があるが、屋根に穴をあけたのは、残念ながら夜蜘蛛であった。夜の蜘蛛に対しては、凶という伝承がちゃんと用意されてある。いわく“夜の蜘蛛は親に似ていても殺せ”

(2) スダレグモ

トンボ研究家の浜田 康氏が、高知新聞に“土佐のトンボ”を連載しておられる。その23号は、“ネアカヨシヤンマ”であったが、その中に次のように記してあった。

ふつうトンボの大敵はクモです。しかし、このトンボは空中にアミを張ってえものを持っているクモをつかまえて食べます。私もクモをつかまえるようすを何度か見ました。巣の上にいるクモ目がけて勢よく体あたりをして、上手につかまえています。もし失敗しても成功するまでくり返し、スダレグモやオニグモなどの大きなものでもつかまえてしまいます。

私は“スダレグモ”におどろいた。聞いたこともない名前である。念のために八木昭博士の“日本産真正蜘蛛目録(1977)”を初めから終わりまで見たが出ていない。どうも方言らしいと思い、浜田氏に電話したところ、違うと言う。以前、だれかに教わって、そういう名前だと信じて使ってきたのだと言われた。クモの実体について尋ねると、さすがトンボに関するベテランだけあって、クモの形態や網のようすを的確に説明された。スダレグモはジョロウグモのことであった。

このヤンマは、すこぶるドウモウなやつで、スダレグモ……ではないジョロウグモの、あの広い網の前後にあるスダレのようなもの、もやもやした網のようなものに何度でも体あたりして穴をあけ、突進して捕えます。……そうですか、ジョロウグモというのですか。

このような話であったが、浜田氏に“スダレグモ”と教えた人も、だれかに教えられていたのを思い出して浜田氏に伝えたかもしれない。“スダレグモ (廉蜘蛛)”とは何と良い名ではないか。名付け親は“スダレグモ”に満足し誇らしく思ったであろうし、聞いた者は、なるほどと感心したに違いない。このようなことが、方言が発生し定着する原点であろう。

(3) ふとん着て寝たる姿の子グモたち

コガネグモの卵のうを開いてみると、中身は孵化後間もないと見られる子グモであった。筆の穂で払うと、50匹ほどが、シャーレの底に落ち散らばった。皆、仰むけにころがってもがいている。なかなか起き上がることができない。まだそれだけの体力がなく、じおり糸を引く能力もないからであろう。

上は、朝のことであったが、夕方見ると、子グモはシャーレのすみに一かたまりになっていた。あの弱よわしくたよりなく見えた子グモたちが、起き上り、歩き、かたまるのは大変なことだったろう。遠く離れたものは、すべるガラス面を少なくとも5、6センチは歩かなければならなかったはずだ。それに、彼らは何を目あてに、また何をたよりにして一か所に集まることができたのであろうか。先に歩いたものが残したじおり糸があれば、それを伝っても行けようが、1令蛛には糸をつむぐ能力はないのである。—— このようにしてまで集まりかたまらなければならない理由は何なのか。

かたまつた子グモは皆、脚を振りからだを動かしている。かたまりそのものがふくらんだり縮んだりしている感じである。すでに第1回目の脱皮を終ったもの、今その最中であるものも何匹か見えた。

翌朝見ると、子グモのかたまりは薄茶色になっていた。オヤオヤと思ってよく見ると、子グモのかたまりを薄茶色のぬけがらがおおっていたのであった。いわば、夏ふとんを着て眠っているといった形であった。確かに眠っているのであろう。かたまりは静まりかえっていたから。

今まで、卵のうを開いて見たたびに、卵がらやぬけがらが、子グモのかたまりの表面に集まったり散らばったりしているのを見て、おかしいおかしいと思っていたが、そのことがはじめて理解できて愉快であった。子グモたちが、互いに絶えず動きもがくことによって、不要になった卵がらやぬけがらを、外へ外へと順送りにしていたのである。子グモたちの行動は、かくすればかく成ると考えてのことではないが、結果的には合目的な行動である。うらやましい行動である。

なぜだろうと思いつけ、観察を続けているうちに、ふとしたことから、疑問が解決したような気になる。これほど愉快なことはない。だから研究はやめられないのである。このような私は、コジキの一種であるかも知れない。確かにコジキである。自然からの恵みをこい続けているから。

Egg -sacs of Japanese Spiders (1)

クモの卵のう写真集(1)

Eiichi Shinkai

新 海 栄 一

クモの卵のうは、カマキリの卵のうあるいはチョウウガのまゆ等と比べると、形状・色彩ともに、さまざまなものがあり、また種類によっては比較的目立つ場所に作られていることから多くの人々の注意を引いたものと思われ、過去68年間に発表された文献を簡単にながめてみても190におよぶ論文・報文に卵のうに関する記述を見ることができる。

筆者は10年前より、クモの生態写真を撮っていたが、その際、網・捕食の写真について卵のうと卵のう保護中の親グモの写真を多く撮影しているので、本号より毎号数種ずつのクモの卵のう写真を発表していきたいと考えている。

一般にヒメグモ科、コモリグモ科、キシダグモ科、カバキコマチグモ、センショウグモ、ヤマジグモなど、よく目につく卵のうはだれもが見ているが、少し目立たなくなるとクサグモ、コクサグモ、ヤミイロオニグモ、ジョロウグモなどの卵のうも見ている方は少ないのではないかと思われる。今回の卵のう写真集ではオオヒメグモ、オニグモのような普通種から、クロヤマジグモ、ホシヒメグモ、モドキ、マメイタイセキグモなどのめずらしいクモまで、今までに撮影されている、あるいは図として発表されている全種の卵のうを扱いたいと考えている。

日本には現在1,000種のクモが知られている〔今後シノニムや学名の有効性などの問題を考慮しても、日本のクモは最終的には1,800種ぐらいになると推定される(イギリス、ドイツ及び日本のクモ全種に対するサラグモ+コサラグモの種数比率より)〕。これだけの種数の中で、また卵のうに関する記述のある文献も190報におよびながら、今日、実際に卵のうが確認されているクモは200種程度にとどまっており、残る800種については卵のうの形はおろか、産卵場所さえ知られていないのが現状である。最も身近な例としては皿網(ドーム網、ハンモック網ともに)を張るアシナガラグモ、シロブチサラグモ、ユノハマサラグモ、クスミサラグモ等の、*Prolinyphia* と *Neolinyphia* に属する全種の卵のうが全く知られていないことがあげられる。

東京クモ談話会では過去10年間、採集観察会や合宿などの折に卵のう調査を行なってきており、また水曜会においても70年代後半、重点的に卵のう調査を行ない多くの成果をあげてきたが、ここ1~2年急速に力の衰えが見られることから、今後は多くの若手会員(大学生、高校生)の努力が期待されている。

(写真1) *Achaearanea tepidariorum* オオヒメグモ

大 き さ：長さ6～10 mm 巾4～7 mm

色 彩：淡褐色または茶色

形 状：写真のように一方がとがった雨だれ型、卵のうによっては球形のものも見られる。全体にしわがある。

個 数：通常3～4個 付着場所：網の上部または網の中

(写真2) *Achaearanea lunata* カグヤヒメグモ

大 き さ：長さ6～9 mm 巾4～7 mm

色 彩：淡褐色または淡黄褐色（オオヒメグモより淡い色彩である）

形 状：同 上 個 数：通常2～3個

付着場所：網の中または上部

(写真3) *Theridion yunohamense* ユノハマヒメグモ

大 き さ：4～5 mm

色 彩：淡褐色の地色に濃褐色の糸が網目状に付いている

形 状：球 形（時に長細いものもみられる）

個 数：1 個 付着場所：腹部に着ける

(写真4) *Theridion japonicum* ヒメグモ

大 き さ：2.5～4 mm

色 彩：肌色または淡黄褐色

形 状：球形またはやや扁平のまんじゅう型（だいふく型）

個 数：3～4個

付着場所：網上部または中央部に吊した枯葉の中

(写真5) *Theridion subadultum* コケヒメグモ

大 き さ：2～4.5 mm

色 彩：淡褐色の地色に濃褐色の糸をまだらに着ける

形 状：球 形 個 数：1 個

付着場所：腹部後端に着け持運ぶ

（大きさ、色彩、形状、個数、付着場所はすべて卵のうについての説明である）



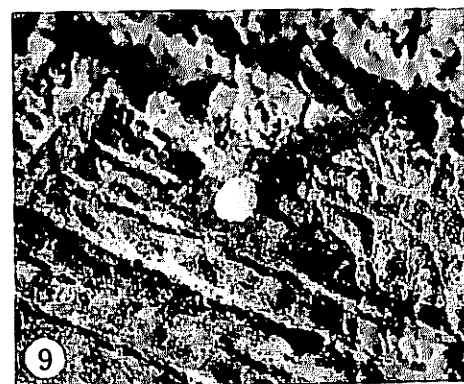
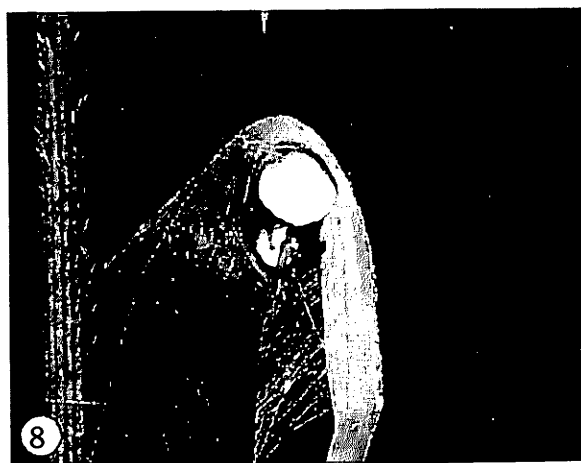
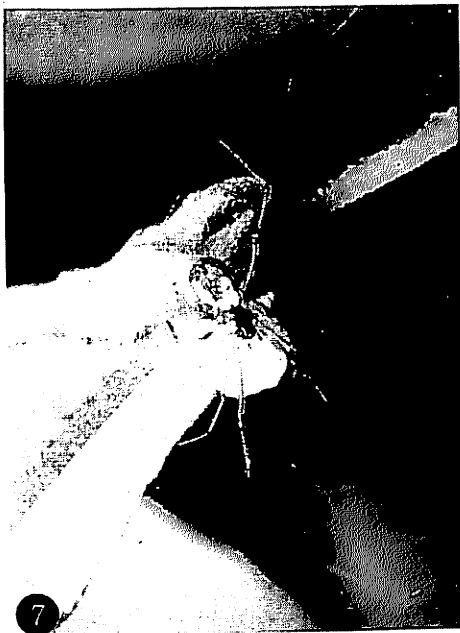
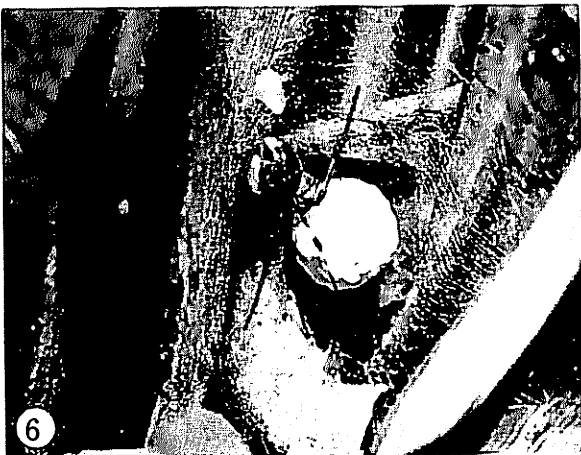
(写真6) *Theridion chikunii* パラギヒメグモ
大 き さ: 3.5 ~ 5.5 mm 色 彩: 白 色
形 状: 球 形 個 数: 1 個
付着場所: 網上部の葉裏

(写真7) *Theridion takayense* タカユヒメグモ
大 き さ: 3 ~ 4.5 mm 色 彩: 白 色
形 状: 球 形 個 数: 1 個
付着場所: 親グモが口にくわえていることが多い

(写真8) *Theridion kompirense* コンピラヒメグモ
大 き さ: 3 ~ 4 mm 色 彩: 白 色
形 状: 球 形 個 数: 1 個
付着場所: 網上部の葉裏

(写真9) *Theridion subpallens* ハイイロヒメグモ
大 き さ: 1 ~ 1.5 mm 色 彩: 白色または淡灰色
形 状: 球形であるが周囲に細い糸が綿状についているのでコンペイト
ウ状に見える
個 数: 1 個 付着場所: 腹部後端に着ける

(写真10、11) *Theridion sterninotatum* ムナボシヒメグモ
大 き さ: 1.5 ~ 2.5 mm 色 彩: 白色または淡灰色
形 状: 凸凹のある球形、やや扁平のものもみられる
個 数: 1 個
付着場所: 親グモが頭部に乗せて持運ぶ
(写真10は側面(高野伸二氏撮影)、11は前面より撮影)



東京蜘蛛談話会観察会報告1979年春～1980年冬

城山（根小屋城跡）のクモ

高 橋 登・松 浦 祐 司

本報告は東京蜘蛛談話会の季節ごとの調査の第8回目の結果である。

採集地は神奈川県津久井湖の城山ダムにのしかかる様にある小山で、昔、城があったことより城山と呼ばれている。城山の神奈川県における位置は図に示した通りで、丹沢山塊と多摩丘陵の境界にあたる。その標高は875mであり、樹木相は植林による杉などの針葉樹林と、クヌギ・コナラなどの広葉樹林がほぼ半数ずつ見られる。頂上からは津久井湖・八王子方面や丹沢方面の眺望がすばらしく、春や秋には家族づれハイカーの多い所である。

今回の結果は四季別一覧表に示した通りで、各季節ごとの採集および観察記録は、50～70種である。しかし、1979年7月29日の記録が少なく、四季別一覧表としては不完全なものとなってしまうことは残念であるが、一年を通しての採集および観察記録は129種となり、まあまあの結果と思われる。

調査場所：神奈川県津久井郡津久井町、城山

調査日及採集者

○第1回：1979年5月13日（日曜日）

採集者：小沢実樹・熊田憲一・熊田理恵・早乙女薫・貞元巳良・佐藤幸子・新海栄一・高橋 登・西貝正彦・蓮沼克己・松浦祐司・松本誠治

○第2回：1979年7月29日（日曜日）

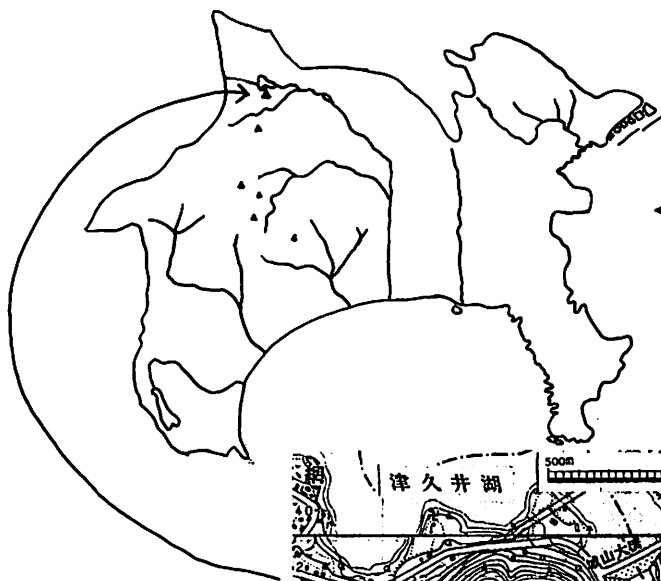
採集者：浅間 茂・梅林 力・梅林順一・梅林 登・小沢実樹・日下部光代・栗原輝代子・佐藤幸子・新海栄一・高野伸二・高橋 登・蓮沼克己・松本誠治

○第3回：1979年10月10日（水曜日）

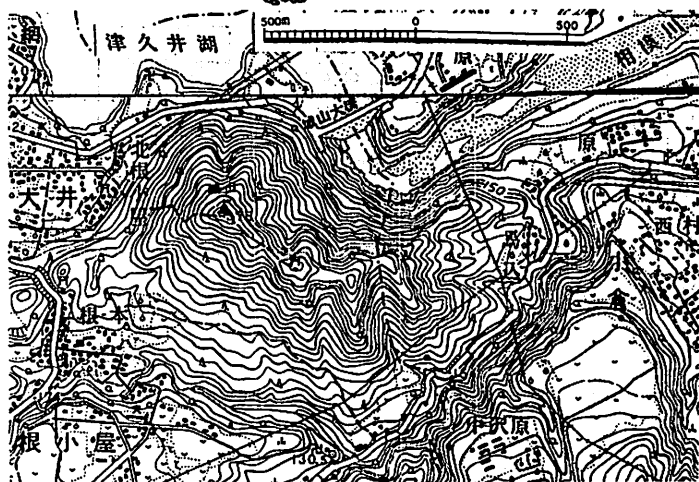
採集者：浅間 茂・小沢実樹・木藤幸雄・日下部光代・栗原輝代子・早乙女薫・嶋田順一・鈴木勝浩・高野伸二・高橋 登・蓮沼克己・藤井悦子・神子島毅

○第4回：1980年2月27日（日曜日）

採集者：浅間 茂・大野経明・小沢実樹・熊田憲一・栗原輝代子・早乙女薫・佐藤幸子・貞元巳良・嶋田順一・鈴木勝浩・新海栄一・高橋 登・蓮沼克己・松浦祐司



← 神奈川県



1980年2月27日
撮影



四季別種類一覧表

- 属および種の配列は「日本産真正蜘蛛類目録」(八木沼・1977)による。
- 四季別一覧表は1979年5月(春)・1979年7月(夏)・1979年10月(秋)・1980年2月(冬)の順に配列した。
- 一覧表に使用した齢期の記号は、Ad → (成体)、sud あるいは s → (亜成体)、y → (幼体)を示している。○印は幼体・亜成体・成体の全部が見られたものである。
- 齢期はすべて当日採集した個体によったものであり、この齢期が各種類の採集月における平均的な齢期でない場合もある。

		春	夏	秋	冬
I. Antrodiaetidae					
1. <i>Antrodiaetus roretzi</i>	カネコタテグモ	○	○	○	○
II. Ctenizidae					
2. <i>Ummidia fragaria</i>	キノボリトタテグモ	○	○	○	○
III. Atypidae					
3. <i>Atypus karschi</i>	ジグモ	○	○	○	○
IV. Uloboridae					
4. <i>Hyptiotes affinis</i>	オウギグモ	—	—	Ad	—
5. <i>Miagrammopes orientalis</i>	マネキグモ	y	Ad	Ad	y
6. <i>Uloborus varians</i>	ウズグモ	y	—	—	y
V. Segestriidae					
7. <i>Ariadna lateralis</i>	ミヤグモ	—	—	—	y・Ad
VI. Pholcidae					
8. <i>Pholcus crypticolens</i>	ユウレイグモ	Ad	Ad	y	y
VII. Theridiidae					
9. <i>Achaearanea angulithorax</i>	ツリガネヒメグモ	Ad	—	—	y
10. <i>A. lunata</i>	カグヤヒメグモ	—	—	—	Ad
11. <i>A. tepidariorum</i>	オオヒメグモ	○	—	○	y
12. <i>Anelosimus crassipes</i>	アシブトヒメグモ	Ad	—	y	y・Ad
13. <i>Ariamnes cylindrogaster</i>	オナガグモ	Ad	○	Ad	y
14. <i>Chrysso argyrodiformis</i>	オダカグモ	—	—	Ad	—
15. <i>C. punctifera</i>	ホシミドリヒメグモ	Ad	—	y	y・s
16. <i>C. venusta</i>	コガネヒメグモ	—	Ad	—	—
17. <i>Argyrodes fissifrons</i>	チリイソウロウグモ	—	Ad	Ad	—
18. <i>A. fur</i>	フタオイソウロウグモ	—	Ad	Ad	y
19. <i>A. saganus</i>	ヤリグモ	—	—	Ad	Ad・y

		春	夏	秋	冬
20. <i>Dipoena castrata</i>	ボカシミジグモ	y	—	—	—
21. <i>D. punctisparsa</i>	シモフリミジグモ	—	s.Ad	—	—
22. <i>Episinus affinis</i>	ヒシガタグモ	Ad	—	—	—
23. <i>E. nubilus</i>	ムラクモヒシガタグモ	—	—	—	y.Ad
24. <i>Phoroncidia pilula</i>	ツクネグモ	—	—	Ad	—
25. <i>Theridion chikunii</i>	バラギヒメグモ	y.Ad	—	—	—
26. <i>T. japonicum</i>	ヒメグモ	—	s.Ad	Ad.y	—
27. <i>T. latifolium</i>	ヒロハヒメグモ	—	Ad	—	—
28. <i>T. rapulum</i>	キボシヒメグモ	—	y.s	—	—
29. <i>T. sternotatum</i>	ムナボシヒメグモ	—	Ad	—	—

VIII. Nesticidae

30. <i>Nesticus brevipes</i>	コホラヒメグモ	—	—	—	Ad
------------------------------	---------	---	---	---	----

K. Linyphiidae

31. <i>Arcuphantes tamaensis</i>	タマヤミサラグモ	—	—	—	Ad
32. <i>Doenitzius parvus</i>	コデーニッツサラグモ	—	—	—	Ad
33. <i>Floronia bucculenta</i>	ハナサラグモ	—	s.Ad	Ad	—
34. <i>Labulla contortipes</i>	アシヨレグモ	○	○	—	○
35. <i>Linyphia oideidicata</i>	ヘリジロサラグモ	—	—	Ad	—
36. <i>Neolinyphia fusuca</i>	クスミサラグモ	Ad	y	y.s	—
37. <i>N. japonica</i>	ツリサラグモ	s.Ad	—	y	—
38. <i>N. nigripectoris</i>	ムナグロサラグモ	—	—	Ad	y
39. <i>Prolinyphia longipedella</i>	アシナガサラグモ	y	—	Ad	—
40. <i>P. yunohamensis</i>	ユノハマサラグモ	Ad	—	—	y
41. <i>Porrhomma tateyamaense</i>	タテヤマサラグモ	—	—	—	Ad
42. <i>Strandella quadrimaculata</i>	ヨシボシサラグモ	Ad	—	—	—

X. Erigonidae

43. <i>Asperthorax communis</i>	ザラアカムネグモ	—	—	—	Ad
44. <i>Nematogmus sanguinolentus</i>	チビアカサラグモ	Ad	—	—	—

XI. Mimetidae

45. <i>Ero japonica</i>	センショウグモ	—	y.Ad	—	—
46. <i>Mimetus japonicus</i>	ハラビロセンショウグモ	—	s	—	—
47. <i>M. testaceus</i>	オオセンショウグモ	—	—	Ad	—

XIII. Araneidae

48. <i>Acusilas coccineus</i>	ハツリグモ	y.Ad	Ad	Ad	—
49. <i>Arachnura logio</i>	キジロオヒキグモ	Ad	—	—	—

		春	夏	秋	冬
50. <i>Araneus macacus</i>	ヤエンオニグモ	s	—	—	—
51. <i>A. uyemurai</i>	ヤマオニグモ	y	—	Ad	—
52. <i>A. cucurbitinus</i>	ハナオニグモ	y	—	Ad	—
53. <i>A. mitificus</i>	ビジョオニグモ	—	—	Ad	—
54. <i>Neoscona scylla</i>	ヤマシロオニグモ	y	—	—	—
55. <i>N. scylloides</i>	サツマノミダマシ	y	—	—	—
56. <i>Zilla astridae</i>	サガオニグモ	y.Ad	—	—	—
57. <i>Z. sachalinensis</i>	カラフトオニグモ	Ad	—	y	—
58. <i>Argiope amoena</i>	コガネグモ	—	y	—	—
59. <i>A. minuta</i>	コガタコガネグモ	y	s.Ad	Ad	—
60. <i>Chorizopes nipponicus</i>	ヤマトカナエグモ	Ad	—	—	sub
61. <i>Cyclosa japonica</i>	ヤマトゴミグモ	—	Ad	—	—
62. <i>C. octotuberculata</i>	ゴミグモ	s	Ad	y	—
63. <i>C. sedeculata</i>	ヨツデゴミグモ	Ad	Ad	y.s	sub
64. <i>Cyrtarachne bufo</i>	トリノフンダマシ	—	—	—	y
65. <i>Nephila clavata</i>	ジョロウグモ	—	y.s	Ad	—

XIII. Tetragnathidae

66. <i>Leucauge magnifica</i>	オオシロカネグモ	y	—	—	—
67. <i>Leucauge</i> sp.	シロカネグモの一種	y	—	—	—
68. <i>Menosira ornata</i>	キンヨウグモ	—	—	s.Ad	—
69. <i>Tetragnatha praedonia</i>	アシナガグモ	—	y.s	—	—
70. <i>T. spuamata</i>	ウロコアシナガグモ	sub	—	Ad	y

XIV. Urocteidae

71. <i>Uroctea compactilis</i>	ヒラタグモ	—	—	○	○
--------------------------------	-------	---	---	---	---

XV. Zodariidae

72. <i>Doosia japonica</i>	ドウシグモ	Ad	—	—	—
----------------------------	-------	----	---	---	---

XVI. Agelenidae

73. <i>Agelena limbata</i>	クサグモ	y	○	Ad	y
74. <i>A. opulenta</i>	コクサグモ	y	○	Ad	—
75. <i>Cicurina japonica</i>	コタナグモ	—	—	—	Ad
76. <i>Coelotes insidiosus</i>	シモフリヤチグモ	—	—	—	Ad
77. <i>C. kitazawai</i>	アズマヤチグモ	—	—	—	y
78. <i>C. modestus</i>	ヤマヤチグモ	—	—	Ad	y
79. <i>Cybaeus nipponicus</i>	カチドキナミハグモ	—	—	Ad	Ad

XVII. Pisauridae

		春	夏	秋	冬
80. <i>Dolomedes hercules</i>	スジボケハシリグモ	—	y	s.Ad	—
81. <i>D. saganus</i>	スジアカハシリグモ	y	—	Ad	y
82. <i>D. sulfureus</i>	イオウイロハシリグモ	y	s.Ad	Ad	y
83. <i>Pisaura lama</i>	アズマキシダグモ	y.s	—	Ad	y
XVIII. Lycosidae					
84. <i>Pardosa astrigere</i>	ウヅキコモリグモ	Ad	—	—	—
85. <i>P. laura</i>	ハリゲコモリグモ	Ad	—	—	y
XX. Thomisidae					
86. <i>Misumenops tricuspidatus</i>	ハナグモ	sub	—	Ad	y
87. <i>Oxyptila decorata</i>	キハダカニグモ	—	—	Ad	y
88. <i>Oxytate striatipes</i>	ワカバグモ	sub	s.Ad	Ad	—
89. <i>Philodromus spinitarsis</i>	キハダエビグモ	Ad	—	y	y
90. <i>P. subaureolus</i>	アサヒエグモ	y	—	—	y
91. <i>Pistius truncatus</i>	ガザミグモ	Ad	—	y	—
92. <i>Synaema takashimai</i>	アマギエビスグモ	—	—	—	Ad
93. <i>Tibellus tenellus</i>	シャコグモ	—	—	y	—
94. <i>Tmarus piger</i>	トラフカニグモ	Ad	—	y	—
95. <i>T. rimosus</i>	セマルトラフカニグモ	—	Ad	—	—
96. <i>Xysticus croceus</i>	ヤミイロカニグモ	Ad	—	y	y
XX. Salticidae					
97. <i>Aelurillus festivus</i>	ヤマジハエトリ	y	—	—	—
98. <i>Boethus sexdentatus</i>	ムツバハエトリ	—	—	Ad	—
99. <i>Carrhotus xanthogramma</i>	ネコハエトリ	Ad	—	y.s	Ad
100. <i>Chrysilla versicolor</i>	メスジロハエトリ	y	—	—	—
101. <i>Dendryphantus atratus</i>	カラスハエトリ	Ad	—	y.s	Ad
102. <i>Evarcha albaria</i>	マミジロハエトリ	Ad	Ad	y	—
103. <i>Harmochirus brachiatus</i>	ウデブトハエトリ	—	—	s.Ad	—
104. <i>Hasarius doenitzi</i>	デーニッツハエトリ	Ad	—	y	—
105. <i>Icius linea</i>	メガネアサヒハエトリ	—	—	y	—
106. <i>Jotus abnormis</i>	チャイロアサヒハエトリ	y	—	—	—
107. <i>J. difficilis</i>	マガネアサヒハエトリ	—	—	y	y
108. <i>Marpissa elongata</i>	ヤハズハエトリ	—	—	Ad	—
109. <i>Myrmarachne innermichelis</i>	ヤサアリグモ	Ad	—	Ad	—
110. <i>M. japonica</i>	アリグモ	—	—	s.Ad	y
111. <i>Pellenes ususudi</i>	ウススジハエトリ	y	—	—	—

		春	夏	秋	冬
112. <i>Plexippus annulipedis</i>	マダラスジハエトリ	—	—	—	y
113. <i>P. setipes</i>	ミスジハエトリ	—	—	—	y
114. <i>Synagelides agoriformis</i>	アメイロハエトリ	—	—	Ad	—
115. Salticidae gen. sp.	ジャバラハエトリ	Ad	—	—	—
XXI. Clubionidae					
116. <i>Chiracanthium japonicum</i>	カバキコマチグモ	sub	—	—	—
117. <i>Clubiona jucunda</i>	ヤハズフクログモ	—	—	—	y
118. <i>C. kurilensis</i>	ヒメフクログモ	—	—	—	Ad
119. <i>C. lena</i>	トビイロフクログモ	y	—	—	—
120. <i>C. vigil</i>	ムナアカフクログモ	—	—	—	Ad
121. <i>Itatsina praticola</i>	イタチグモ	Ad	—	—	—
122. <i>Phrurolithus komurai</i>	コムラウラシマグモ	Ad	—	y	y
123. <i>P. nipponicus</i>	ウラシマグモ	—	—	y. s	—
124. <i>P. pennatus</i>	ヤバネウラシマグモ	—	Ad	—	—
125. <i>Trachelas japocinus</i>	ネコグモ	—	—	Ad	—
XXII. Heteropodidae					
126. <i>Heteropoda forcipata</i>	コアシダカグモ	y	○	○	○
XXIII. Ctenidae					
127. <i>Anahita fauna</i>	シボグモ	y	—	y	—
XXIV. Gnaphosidae					
128. <i>Zelotes pallidipatellis</i>	マエトビケムリグモ	—	—	—	Ad
129. <i>Zelotes</i> sp.	ケムリグモの一種	—	—	y	—
合 計		68	36	69	57

城山において開かれた4回の採集会の結果は以上の129種であった。これらのクモの季節相の考察ならびに分類・分布・生態上の重要性のある種については次号に発表の予定である。

編集後記

Kishidaia 45号が昨年春に発行して以来、早いもので、あっという間に1年以上がたち、桜の季節を通り過ぎ、ギラギラした太陽の下でクモを追いかける季節になってしまいました。

さて、今回の46号でKishidaia が1969年1月に発行されてから、12年がたちました。この間に発行されたKishidaia を読みかえてみますと、はじめの頃に比べて、たいへんにりっぱになっております。りっぱになったことは、会員一人一人の努力の成果であり素晴らしいことなのですが反面、気楽な気持ちで原稿を書いて下さる方が減ってきているのも事実です。せっかくの観察記録などがうずもれてしまうことは、とても残念な気がします。小さな観察記録などがKishidaia の中に増すことは、談話会の発展にもつながりますので、遠慮せずに、どんどん原稿を書いて下さい。

最後に、46号の発行が遅れたことをおわびするとともに、原稿の回収・校正などに多大な協力を戴いた、新海栄一、熊田憲一の両氏、運営委員の方々にお礼申し上げます。

56年度運営委員

萱嶋 泉・熊田憲一・栗原輝代子・貞元巳良・嶋田順一・新海栄一・鈴木勝浩・高橋 登・
連沼克己・松浦祐司

本会代表：萱嶋 泉 総 務：新海栄一 会誌編集：貞元巳良

会計監査：大熊千代子・小沢実樹

本 部	〒191	東京都日野市豊田1896	萱 嶋 泉
事 務 局	〒185	東京都国分寺市本多1-6-6	新 海 栄 一
原稿受付（編集局）	〒226	神奈川県横浜市緑区竹山町1-12-11	貞 元 巳 良
通信用原稿受付	〒211	神奈川県川崎市中原区荻宿612	松 浦 祐 司
会計受付	〒190-11	東京都西多摩郡羽村町羽加美3-6-31	熊 田 憲 一

振替 東京7-74885

KISHIDAIA № 46 1981年3月30日印刷 編集者 嶋 田 順 一
1981年3月31日発行 発行者 萱 嶋 泉
発行所 東 京 蛛 蜘 談 話 会
〒191 東京都日野市豊田1896 萱 嶋 泉 方
印 刷 有限会社 ユニオンプレス社
〒185 東京都国分寺市東恋ヶ窪3-34-1